

アルベール・カミュは、未来に興味をもたない。彼は「現在の豊かさを断念しないために」「この世のあらゆるくもつとあとで>」を斥ける。では、過去についてはどうだろうか。カミュは『貧民街の声』、『ルイ・ランジャール』、『裏と表』、『最初の人間』などの自伝的作品の中で、自分の子ども時代について書いており、ことあるごとに自分は幸福な少年期を過ごしたと述べている。しかし、我々はカミュの家が貧しかったことを知っている。母親の沈黙と無関心が彼を苦しめたことを知っている。17歳のときに結核にかかり死の恐怖に脅かされたことを知っている。それなのになぜ幸福だったと言えるのだろうか。

「貧しさは私にとって決して不幸ではなかった。世界がその富をそこにまき散らしていたからである」と、カミュは『裏と表』の序文に書いている。海、空、太陽といった自然の美が、貧困という不幸を補填・相殺するという考え方である。また、その一方で、カミュは貧困そのものを讃美している。『裏と表』に収められたエッセー「ウイとノンの間」で彼は、夏の夜、家の前に椅子を出し、星を眺めながら夕涼みをした少年期の思い出を描きながら、貧しさは夜空の美しさを味わう必須条件であるとしているのである。ジャーナリストとしてのカミュ、政治に参加する人間としてのカミュは、社会の不平等を是正し、貧困を撲滅するために戦ったが、作家としてのカミュは、貧困に価値を与え、賞賛していると言えよう。

結核については、カミュは作品の中でほとんど何も語っていない。自らが結核にかかったという事実を否認しようとしているのではないかと思えるほどである。結核体験が彼に死の恐怖や死の意識を植え付けたことは確かであろう。しかし、彼は死を自身の個人的な問題として考えるのではなく、人間一般の運命として考えようとする。そのような普遍化のプロセスを経ることによって、はじめてカミュは死の問題を直視することができたのではないだろうか。

母親について言えば、カミュにとって母親は唯一にして絶対の肯定的存在であったとよく言われる。しかし、『貧民街の声』や『裏と表』に見られるのは、いつも黙りこくり、息子に対して無関心な「悪い母親」像である。カミュは作品の中で、そのような母親の姿を描きながら、同時に母親の沈黙と無関心を正当化し、母親の理想化、さらには神聖化を試みているように思われる。その意味では、カミュの自伝的エッセーに描かれているのは、少年カミュが生きたありのままの現実ではなく、大人になったカミュが作家の目で見えた現実であると言うべきであろう。

カミュは決して自分にとって都合のいいように過去を歪めて書いている訳ではない。現実を変えることなく、そこに意味や価値を見出そうとしているのである。現在を生きるためには、自らの過去を理解し、受け入れることが必要である。だから、彼は作品の中で繰り返し自分の子ども時代を描いた。そうすることで、カミュは、自らの過去、過去の苦悩を、現在の目でとらえ直し、過去と和解することを模索していたのではないだろうか。